



## プロダクション・ノート

ベン

**「音楽家の引退は、自分の中に音楽が消えたとき。  
私の中にはまだ音楽があります」**

ナンシー・マイヤーズの映画は、何らかの恋愛関係——交際から結婚、離婚、そしてその後の関係——をコミカルに、痛烈に、そしてつねに誠実に探っているのが共感を呼んできた。マイヤーズ作品には必ず、キャラクター同士の友情のエピソードがある。そしてこの『マイ・インターン』では、その友情こそがストーリーの核なのだ。

マイヤーズはこう語る。「私の映画はいつも人間関係が軸になるけれど、ロマンチックな関係以外にもいろいろな関係がある。だから、年配の男性が創業間もない会社でインターン（見習い社員）になるというアイデアを思いついたとき、それは伝統的な意味でのラブ・ストーリーにはならないと気づいたの。そうでなければ決して出会わなかったであろうふたりの間の絆と友情を描いたストーリーになると」

本作では、人間関係以外でその人物のアイデンティティー形成に大きな役割を果たす人生のひとつの要素、つまり仕事にも焦点をあてている。マイヤーズは映画の冒頭で、フロイトの言葉を引用し、その重要性を強調している。「愛と仕事は人生のすべて」。マイヤーズはこう語る。「人生で目標をもつことと、評価されることは、愛し愛されることと同じぐらい基本的に必要なことだと思う」

だが、仕事から引退し、最愛の人も逝ってしまったとき、私たちはどこで何をすればいいのだろうか？

それこそが、本作の主人公コンビのひとり、ベン・ウイテカーが直面するジレンマだ。

地元ブルックリンの創業間もない会社に再就職するチャンスを得るベンを演じたのは名優ロバート・デ・ニーロ。彼は、マイヤーズと初めて組めたことがとてもうれしかったと言う。「これは、ナンシーらしい映画だし、彼女が得意にしているタイプの作品だよ。ある意味でハリウッドの伝統的なコメディを継承しながらも、決して過去の作品ではなく、とても現代的だ。この映画で彼女が描いているのは、多くの人々に通じるものじゃないかな。シニア世代になると、年をとったこと以外で自分の何かが変わったのかどうかはよく分からない。でも、まだまだたくさん世の中のためにできることはあるし、何かを作り出すこともできるんだ」

ファッション通販サイト“アバウト・ザ・フィット(ATF)”の創業者ジュールズ・オスティン役でデ・ニーロと共演したアン・ハサウェイはこう語る。「ナンシーは、ハートのあるすばらしいフィルムメーカーだし、個人的には、私がこれまで出会った中でたぶんいちばんユーモアがある女性だと思うわ。コメディのタイミングが完璧なの。でも彼女の映画は単に笑えるだけじゃないのよ。日常生活での切実な苦しみを、温かく、そしてすごく人間的に扱っているの」

製作のスザンヌ・ファーウェルは、マイヤーズの1998年の監督デビュー作『ファミリー・ゲーム／双子の天使』で彼女のアシスタントを務めて以来、コラボレーションを続けてきた。そのファーウェルはこう語る。「ナンシーの映画は時代を超越しているの。つねに深刻な問題が起きるんだけど、それがユーモアたっぷりに描かれる。それが彼女のトレードマーク。バランスのとりが絶妙だから、観客はそれに反応する。この映画でもナンシーは、働く女性たちのこと、引退後にいかに社会と関わり続けるかの問題など、時代を反映したトピックを盛り込んでいるけれど、それらをふつうとはちょっと違う視点で捉えているの」

本作でマイヤーズはストーリーの中に、ふたつの世代背景を興味深い形で効果的に盛り込んでいる。片やベンが代表する初期のベビーブーム世代、片や社会人としてもっとも若い新世紀世代。元電話帳会社の重役だったベンが、出来たての会社のほとんどペーパーレス世界に入ったときに直面するカルチャー・ショックを、マイヤーズはじつに楽しげに描いている。この新しい会社では、カジュアル・“フライデー”ではなく、カジュアル・“エブリデー”であり、ハンカチなど持ったことがなく、フード付きのパーカーで仕事をし、誰もが使うのは電話帳(フォーンブック)ではなくフェイスブック、直接話す代わりにツイッターでつぶやき、感情表現は絵文字に頼り、コンピューターは大容量、紳士的な細かい気配りなんてどこへやら。

「今の世界は急速に変化していると思う。物事がどんどん動いているの」とファーウェルは言う。「ここに長い人生の経験で培った豊かな知識と知恵を仕事にいくらでも生かせるベテランがいる。一方で、この若い会社では働き手の中心が、キャリアに対する姿勢もアプローチもまったく違う新世代なの」

そしてマイヤーズは、生まれたての会社という刺激的な環境を本作のストーリーの舞台にした。「必然的な文化の衝突を展開させるには、新しい会社という環境がいちばん興味深く、楽しいんじゃないかと思ったの」と彼女は言う。

「あれはふたつの世代がぶつかり合って楽しい職場だったわ」とハサウェイは言う。「技術的、社会的なものが進歩したなかで、進歩を妨げてきた多くのものが世の中からゆっくりとなくなっていつている。ただ残念ながら、品格というのも消えつつあるみたい」

デ・ニーロも同感だ。「経験と伝統は確かにいいものなんだよ。ナンシーはそれをこのストーリーで訴えている。ある意味、若者より老兵を重視するストーリーなんだ」

そのジェネレーション・ギャップはまた、ちょっと面白い“逆転”にもつながっており、それは本作の中でも反映されている。マイヤーズはこう説明する。「女の子は大人の女性へと成熟したのに、男は逆に大人の男から男の子になった。女の子たちは、やってみれば何でも達成できると言われたのに、私が思うに男性陣は、時代の変遷のなかでちょっと道を見失ってしまい、今でも出口を模索しているんじゃないかしら」

## “アバウト・ザ・フィット”の人々

ベン

「失礼します。新人のベンです」

ジュールズ

「面白い試みでしょ」

ベン

「確かに」

観客が初めてベン・ウィテカーに会うのは、太極拳のクラスだ。それについてナンシー・マイヤーズはこう説明する。「太極拳を選んだのは、それがどこかユーモラスなだけでなく、ベンなら太極拳がどれだけ自分にとっていいものかを知っているはずだと思ったからなの」。これはすぐに分かってくるのだが、ベンは明らかに禅の境地を求めているものの、引退して妻にも先立たれた男として、不安定な気持ちになるのを未然に防ごうとしている。彼はさまざまなことにチャレンジしていて、太極拳はそのひとつにすぎない。ベンはスケジュールを埋めるために、ゴルフやピノクル(トランプのゲーム)をし、映画を観に行き、読書に勤しむ。料理教室に通い、北京語を習い、ヨガを試し、たまったマイレージを全部使って世界を旅してもみた。だが何かはまだ足りないのだ。

マイヤーズはこう語る。「ベンは働いていた日々が恋しいの。行く場所があることがね。彼はまた何かの一部になりたいのよ。彼は毎朝7時 15分までにスターバックスに行くんだけど、それは、慌しさの端っこに身を置いていたいからなの」

「ベンはものすごいキャリアを築いたわけじゃないけど、彼なりに成功を収め、自分は幸運だったと感じているんだ」とロバート・デ・ニーロは語る。「引退した今、彼はその生活が期待していたものとは違うことに気づく。もちろん、引退の状況にもよるんだろうけど、ベンは自分の仕事がいかに好きだったんだよ」

マイヤーズにとって、ベン役としてデ・ニーロの出演がなかったことは、キャスティングの大手柄だった。「ボブ(デ・ニーロの愛称)は、とてつもない深みと多彩さをもつすばらしい俳優。彼がこれまで出演したコメディでは、タフ・ガイのコミカルさを演じることが多かったけれど、この映画では、彼の違う一面を見ることができるの。この映画で彼は、アン・ハサウェイ演じるジュールズのインターンだけれど、指導される側から彼女に助言する側になっていく。でも彼の相手役はジュールズだけじゃなくて、若手俳優たちとも絡むシーンが多いの。その数人は(コメディ専門局の)コメディ・セントラルで活躍していて、ボブとは経歴がまるで違う。だからこそ、スクリーン上でも、撮影の合間でも、とても充実した時間が生まれたのよ」

さて、ベンは猛スピードで成長しているファッション通販サイト“アバウト・ザ・フィット(ATF)”で“シニア”・インターンに採用され、創業者のジュールズに初めて会う。ジュールズは、シニアの採用に同意したものの、シニアとは学生、つまり大学4年生のことだと思っていたのだ。

「ジュールズは年配の人とあまりうまく付き合えないのよ」とマイヤーズ。「母親との関係がちよっとゴタゴタしているということもあって、彼女はシニア・インターンの指導者として自分は適任とは言えないと感じているの」

ハサウェイはこう付け加える。「ジュールズは最初、反対するの。彼女のビジネスも日々の生活も猛スピードで動いているので、年配者だとペースを落とさせられるんじゃないかと思うわけよ。でも、実際はシニア・インターン・プログラムこそ、彼女に必要なものなのかもしれない」

「ジュールズはA型人間、つまり、“何でも前のめりでやろう”という精神が強い」とハサウェイは続ける。「彼女はすごく頭が切れる。そしてすばらしいハートの持ち主という点も私はとても好きなの。ジュールズの会社があればどううまくいっているのは、彼女が敏腕だからというだけではなく、やることすべてが純粋な情熱とビジョンから生まれているからなのよ。そしてそれは、監督のナンシー自身の人柄の反映でもあるの」とハサウェイはにっこりする。

マイヤーズによれば、ハサウェイの仕事に対する姿勢は、演じたキャラクターとそう変わらないそうだ。「アンはとてつもなく引き出しの多い人。スクリーン上ですばらしい原動力とエネルギーを発揮してくれて、何でもこなせる数少ない女優のひとりよ。必要なときはコミカルになれるし、もっとドラマチックなシーンではもろさと誠実さを表現できる。それに、まっすぐ突き進むのではなく、予測不能なところもあって、そこが私はとても好きなの」

シニア・インターンに関してジュールズの側で最初、抵抗感だったものはすぐに尊敬と感謝に変化する。ハサウェイはこう語る。「コンピューターには詳しいけれど、人との直接的なコミュニケーション力はあまりなさそうな若いスタッフばかりの会社で、ベンは、みんなにコンピューターから顔を上げて、しっかりと人と向き合いたい気持ちにさせる人なの。ジュールズは、瞬時に決断をする世代の人間——クリックして、ツイートして、投稿して、ごみ箱に捨てる——なので、きっと自分自身にかなりプレッシャーを与えていると思う。そんな彼女の前に現れたベンは、彼女の言い分に黙って耳を傾ける。批判したりせず、彼女をそのまま受け入れ、穏やかな雰囲気をもたらすの。ジュールズは自分が扱いにくい人間であることを知っているけど、ベンはそこが彼女の長所だと思っている。ほかの人を引かせてしまうんじゃないかと彼女自身が恐れているすべてを、彼は価値ある人間の証拠だと見なすのよ。彼は必要とされたいと思ってインターンになったのかもしれないけれど、結局、彼女のほうも彼が必要だったのよね」

デ・ニーロもこう語る。「ジュールズはとても野心的で頭がよく、自ら創り出したこのビジネスで、幸運にもニッチ(隙間市場)を埋めることができています。何かを始めたばかりのときは、たっぷりの愛情と注意力で取り組まなければならないと思う。徹底的にそれに入れ込まないといけない。ジュールズはそうだ。彼女は人任せにしない。すべてが正しくきっちり仕上がるように、あらゆる細部にまでこだわり、自分の目で確認する」

「ベンとジュールズの間で少しずつ築かれていく友情こそが、私を執筆に駆り立てる要素だったの」とマイヤーズは言う。「このストーリーを動かしているのはふたりの絆なのよ」

マイヤーズはまた、デ・ニーロとハサウェイの化学反応／ケミストリーによって、ふたりのキャラクター間にパワフルな力関係が築けたと考える。「ケミストリーというのは、運しだいという不思議

な要素なのよ」とマイヤーズは語る。「無理に創り出すことはできない。あるか、ないか、なの。ベンとジュールズの間には特別な何かがあり、それは演じたボブとアンにも言えること。スクリーン上でもそれがはっきり分かるはずよ」

俳優ふたりも、まったく同じように互いへの称賛を口にする。「こういうコメディには、ある種の的確さが必要で、それにはセリフとタイミングが大きな要因となるんだ」とデ・ニーロ。「だからこそ、よきパートナーが必要で、私にとってアンはまさに最高のパートナーだった。彼女はプロ意識がとて高く、ほんとうのチーム・プレーヤーなんだ。すばらしかったよ」

「ボブと一緒にほんとうに幸運だったわ」とハサウェイは力を込めて言う。「彼はとにかくステキな人で、言うまでもなく、ベンとしてもすばらしかった。彼がああ鋭い演技を見せるたび、自分の魂が震えるのを感じるのよ。だって、パワーがものすごく強烈で、明確であるうえに、そのすぐ横にいるんだもの。でも彼はとても謙虚で肩の力が抜けて気さくなので、歴史上でも最高の俳優のひとりだということを一瞬、忘れてしまうの」

さて、ATFでベンが働きかけとなるシニア・インターン・プログラムは、会社の COO (最高執行責任者)であるキャメロンの発案だ。演じたアンドリュー・ラネルズは、キャメロン自身、自分が思いついたプログラムがどれほど成功するのか、あるいは、ボス(ジュールズ)だけでなく自分自身にもどれぐらい役に立つのか、予測もしていなかったと説明する。「ベンがジュールズにもたらした効果は、キャメロンにも波及するんだ。キャメロンは、ベンが加わってからジュールズがより効率性と自信を獲得していくことに気づく。それによって、彼女と会社を正しい方向に進ませ続けるという彼の仕事がやりやすくなるんだ」

ジュールズは最初、ベンの手を借りることに躊躇するが、彼女のスタッフやベンと同じインターンたちは、この新しい同僚の経験から積極的に学ぼうとする。インターン担当のATF社員ジェイソンを演じたアダム・ディバインはこう語る。「ベンは昔かたぎの人間で、男がビジネスを支配する世界で生きてきたにもかかわらず、この新しい世界に足を踏み入れると、それを気に入っただけでなく、うまくやっていた。そこがクールなんだ」

ハイテクに精通したインターン、ルイスを演じたのは新人のジェイソン・オーリー。本作が俳優デビューであるにもかかわらず、マイヤーズは彼をよく知っている。というのも、彼は『恋するベーカーリー』のセットで、マイヤーズのまさにインターンを務めたからだ。「あのときは、モニターを前にナンシーの横に座り、ひと夏で大学の映画学部4年分に等しい経験をさせてもらったよ。ごめん、ニューヨーク大学！」とオーリーはにっこりする。「今回、彼女からメールで『あなた、演技はできる?』と聞かれたときは、てっきりからかわれてると思った」

「ジェイソンはいつも私を笑わせてくれたの」とマイヤーズは言う。「でも彼を面白いと思うのが私だけではないことを見極めるために、彼にはほかの誰よりも多くオーディションを受けてもらったのよ。彼はロサンゼルスから台本の読み合わせにやってきて、この映画のベテラン俳優たちの中に放り込まれた。ふつうならすごいプレッシャーよね? でも彼は見事にやってのけたわ」

ザック・パールマンが演じるもうひとりのインターン、デブスは、パールマンいわく、「26歳の体に入った精神年齢14歳の男」だそうだ。「デブスはまだどうすれば大人になれるのかが分かっていないんだ。だから、彼はベンを人生の師と仰ぎ、アドバイスをもらうようになる。彼にはアドバイスがたくさん必要なんだよ」

「キャストの若い男の子たちは誰もがすばらしかったわ」とマイヤーズは思い返す。「彼らの中から新しいコメディの才能を探り出すプロセスは楽しかった」

マイヤーズはまた、キャストの実際に関わり合い方が、スクリーン上の関係に影響を及ぼしていた様子が微笑ましいと感じた。「映画では最初、オフィスの若者たちはこの 70 歳の新人がコンピューターの起動方法を知らないことにびっくりするの」と彼女は言う。「でもやがて彼らはみな、ベンに助言を求めに行くようになる。自分たちに混じって働くこの思慮深い男に誰もがとても興味を抱き、刺激を受けるの。そして彼のようになりたくなる。ちょうど、若い俳優たちがポップに刺激を受けたようにね。ザック、アダム、ジェイソンはいつもポップのそばにいたがったものよ。それこそ、インターンたちのベンに対する気持ちと同じなので、私はその様子を見るのがとてもうれしかった。もちろん、ポップは彼らにとってもよくしていたわ」

「彼らはみな、すばらしい若者だった。ユーモア抜群だしね」とデ・ニーロ。「彼らといるとすごく楽しかったよ」

ハサウェイもうなずく。「私は彼らのエネルギーが大好きだったわ。それぞれが自分のコメディ・スキルにしっかりした自信をもっていた。あんなに多くの新鮮な顔ぶれとコラボできて楽しかったし、そのおかげで共演シーンではとてもいい掛け合いができたのよ」

新鮮な顔といえば、ジュールズの秘書ベッキーを演じたクリスティーナ・シェラーもそうだ。彼女はベッキーをこう説明する。「ベッキーはいつも焦っているタイプ。ジュールズを失望させるのが怖くてたまらないので、よく整理せずにとにかくやり続けようとするの」

ベンの新しい同僚は、彼の子供とっていいほどの若者ばかりだが、オフィスで彼の年齢に近いある人物が彼の目を捉える。マイヤーズは、レネ・ルツを念頭にそのATFの専属マッサージ師フィオナというキャラクターを創った。「フィオナは、ベンが妻を亡くしてから、たぶん初めて本物の関心を示した女性なの」とマイヤーズは言う。「それは彼女が美人だからでなくて——実際に美人だけど——とても心の温かい、存在感のある人だからなのよ」

「レネを選んだことをポップに話したら、彼はレネと2本の映画で共演したと教えてくれたの」とマイヤーズは続ける。「私はそれを全然知らなかったんだけど、ふたりはすでにとってもいい関係を築いていたので、まさに完璧だった。レネには、周囲の人を巻き込むようなかわいらしさがあるの。それに仕事仲間としても最高よ」

ルツはデ・ニーロと共演したことはあったが、本作ではふたりにとっての“初体験”があった。「今回私はあのロバート・デ・ニーロをマッサージしたのよ。ねえ、こんなひどい話ってある？」とルツはジョークを飛ばす。「ポップと一緒に仕事をするのがとても楽しい人だし、私はもともとナンシーの映画全部が大好きなので、出演を決めたの」

さて、ジュールズの運転手役を引き継いだベンは、彼女の家族生活にも通じるようになる。マイヤーズはこう語る。「私自身、ずっと仕事をしてきた女であり、2児の母でもあるので、仕事をしっかりやって、なおかつ、夕食までには必ず帰宅しようとするのがどんなに大変だったか、鮮明に覚えているの。だから、2015 年の新しい世代の家族が、仕事とのバランスをどうとっているのかを検証するのは興味深かったわね」

ジュールズの夫で、いわゆる“育メン”になったマットをアンダーズ・ホームが演じ、ふたりの娘ペイジをジョジョ・クシュナーが演じた。ホームはこう語る。「ジュールズは(仕事も家庭も)よく頑張っているんだけど、高まる期待に応えようとして、朝から晩まで無理をし過ぎているんだ」

そして職場でも家でもプレッシャーが大きくなるにつれ、ジュールズは仕事と家庭の両方で大きな決断を迫られることになる。

## ニューヨーク

ベン

**「ブルックリンに長年、住んでますが、  
最近、おしゃれに変わったので、  
私も変わりたい」**

本作の撮影は、ニューヨークのマンハッタン、ブルックリン、ブロンクスの実際のロケーションと、ブロンクスに隣接するヨンカーズ市のサウンドステージでおこなわれた。

監督のナンシー・マイヤーズは、本作の制作のあらゆる側面で、俳優を含むチーム全員と、ユニークな方法でコミュニケーションをとった。そのツールが“Pinterest／ピンタレスト”である。(注：インターネット上の画像を自分のボードに集めることができる画像収集サービス。)  
「私は Pinterest が大好きなの」とマイヤーズは言う。「Pinterest を使い始める前の私は、みんながうんざりするほどしゃべりまくっていたのよ。まあ、今でもそうだけど」。マイヤーズは、各キャラクターと、全部の主要セット用に Pinterest のボードを使えば、自分のイメージを明確に伝えやすいと考えたのだ。

「みんなにとって、そのキャラクターの本質にいくらかでも入り込むことができ、住んでいる世界を知ることができたので、とてもいい方法だったわ」とマイヤーズ。

美術監督のクリスティ・ズイーはこう語る。「ナンシーのすごいところは、無数のウェブサイトと画像を隈なく検索し、ズバリ欲しいものを見つけて集められるだけのエネルギーがあるということよ。彼女は見事に的確なものを探し当てるので、私たちはそれを見て、『そういうことね、分かった』と言えたの。ナンシーがセットに来て、『すごい、私の Pinterest のまんま！』と言ってくれることが、私たちにとって最大の褒め言葉だったわ。ナンシーは審美眼が鋭く、細部まで正確な人。彼女は自分が何を求め、何を求めているかを明確に分かっている。装飾、色彩、スタイルに関する知識も膨大で、そのすべてに関して極めて目が利くの」

そしてズイーはこう付け加える。「この映画のスタイルはおしなべて、ミニマリズムを追求しているわ。シンプルで余計な装飾はなし。色彩もやわらかく、天然素材、生地、ストライプを使った」

本作のメイン・セットは、ブルックリンのレッドフック地区にある“アバウト・ザ・フィット(ATF)”のオフィスである。ブルックリンのロケハン後、フィルムメーカーたちがそのスペースにぴったりな物件を見つけたのは、ブロンクスのライト・ボックスという写真スタジオだった。そのスタジオは、バンクノート・ビルディングという1970年代まで世界の半分以上の紙幣を製造していた大きな建物の2階にある。マイヤーズは、その建物の独特の大きな窓、年代物のレンガ、差し込む自然光を大いに気に入った。それは撮影監督スティーブン・ゴールドブラットにとっても大きな利点となった。

急成長中のオンライン通販会社の雰囲気は、マイヤーズがリサーチした本物の新会社に基づいている。ズィーとマイヤーズは数多くの新会社を見学したのだが、それらはすべて、極めて現代的な雰囲気をもつ広々としたスペースだった。

ATFのオフィス・レイアウトはオープンスペースだ。ジュールズでさえ、個室を持たない。美術チームは、ガラス張りの会議室を設置し、床を磨き上げ、社員用の設備——マッサージ室とオープンキッチン・エリア——を作った。いくつもの白いデスクとグレーの椅子が運び込まれ、共用エリアにはCB2(手頃な価格のインテリアショップ)のソファがいくつか置かれた。「私たちが意識的に選んだのは、ジュールズが新事業に用意するであろう予算内に収まる物品だけだったの」とマイヤーズは言う。

「内装は折衷的にしたの。伝統的なミッドセンチュリー・モダン様式に再利用の材料を組み合わせてたり、その場で調達したものもあった。それはブルックリン、オンライン通販、出来たての会社、ファッション……そういったものを反映しているのよ。新鮮で粹な感じ」とズィーは語る。

マイヤーズのビジョンは、ズィーと、アート・ディレクター監修のW・スティーブン・グレアム率いるチームの手で具現化された。彼らは、ATFのホームページもデザインする必要があった。それは通販会社にとって不可欠なものであり、映画の中ではコンピューターのモニター上に映し出される。プリプロダクション中に写真撮影がおこなわれ、それらの画像はATFのオフィスとホームページ上で使われた。

セットの制作過程を見ていたとはいえ、マイヤーズはこう語る。「デスクが届き、会社のロゴが付けられたときに初めてあのセットに足を踏み入れたんだけど、ワクワクしたわ。本物だと感じたの。ジュールズならきっとこんなオフィスにすると考えた。ATFという会社を創り出すためにみんなが頑張ってくれて、とてもうれしかったわ」

映画の中心はジュールズの職場とはいえ、主役ふたりの家も垣間見ることができる。「人の家にはいろいろなストーリーが詰まっているので、映画全体のイメージにとっても重要なものよ。私はキャラクターたちの家を見せるのが好きなの」とマイヤーズ。

ブルックリンのパーク・スロープ地区にあるジュールズとマットの家には、クリントン・ヒル地区にある、改修済みだったブラウンストーンを張った建物が選ばれた。その家の全体的な色彩デザインを考えたとき、マイヤーズはより暗いチャーコールに惹かれた。

その家について、ハサウェイはこう語る。「ナンシー作品ではいつも、誰もが欲しがるキッチンが登場するんだけど、この映画も例外ではなかったわ。短い期間でも、有名な“ナンシー・マイヤーズのキッチン”のある家に住めて感激だった。ちゃんと料理もできるようになっていたのよ」

ベンの家を見つけるのはより大きなチャレンジとなった。「それはベンという人物には古さと新しさが混在するからよ」とズィーは説明する。そしてブルックリンのコブルヒルにあるブラウンストーンの家が選ばれた。ジュールズの家よりも天井が低く、小さい家だ。

セットでの重要な細部の装飾には、それぞれのキャラクターの家に合わせてアートが選ばれた。ジュールズの家には、とても興味深い印刷物のコレクションとモノクロ写真が、ページのカラフルな絵と並んで飾られている。ベンの家では、ロバート・デ・ニーロSr.の絵を採り入れた。デ・ニーロは、フィギュラティブ派の画家だった父の名を受け継いでおり、ニューヨークの父のアトリエを保存するとともに、父に関するドキュメンタリーを制作した。「私たちがボブの家に行ったら、『何でも好きな作品を選んでいい』と彼に言われたの」とズィーは明かす。

「私の父の作品何点かを家に飾るとするのはナンシーのアイデアだった。私にとってはとても意味深かったよ。我が家という雰囲気作りにも役立ったんじゃないかな」とデ・ニーロは語る。

マイヤーズはまた、ベン之家に彼の妻との歴史を反映させたかった。「彼は40年間結婚していたの。(妻に先立たれた今でも)独身者の部屋ではなく、妻と暮らした家に住み続けている。だから、キッチンでも、どの部屋でも、彼女の存在が感じられるようにしたかったの」とマイヤーズは語る。実際、インターンのひとりが訪れたとき、ベンがベッドに装飾用のクッションを今でも並べていることに気づく。それは彼の妻がいつもやっていたことなのだ。

ベン之家でもうひとつ、個性が表れているのは彼のクローゼットだ。製造業界の重役として成功を収めた人物としての歴史が反映されている。ズイーの美術チームは、もはや彼が属していない部分の人生を象徴するクローゼットを作った。

ブルックリンではほかにも、ATFの倉庫、コーヒー店2軒とマーケット用のロケーション、パーク・スロープのページの学校、ベンとページが誕生会に参加したコブルヒル・パーク、ベンの太極拳クラスが開かれるプロスペクト・パークなどが撮影に使われた。また、ブルックリンのディットマス・パークにあるビクトリア朝の家は、コネティカット州ニューヘイブンのジュールズの実家の代役を務めた。そして、サンフランシスコのフェアモント・ホテルでジュールズがベンに秘密を打ち明ける重要なシーケンスは、マンハッタンのパーク・アベニューにある高級ホテル、ウォルドルフ・アストリアで撮影された。また、ジュールズがベンたちインターンと飲む意味深いシーンが撮影されたグリーンポイントのティーズ・バー&グリルなど、ブルックリンではさまざまな実際の場所が使われた。

あるユーモラスなシーケンスでは、こんなことがあった。ジュールズのために、ベンとインターンたちがオフィスの外で問題解決に奮闘している間、アダム・ディバイン演じるジェイソンが車の中で、バスタ・ライムスの「Break Ya Neck (ブレイク・ヤ・ネック)」に合わせてラップに興じている。彼は気づかないが、ほかのインターンたちは暑いなか、階段を駆け上がったたり、駆け下りたりしている……というシーケンスだ。いつものウールのスーツにネクタイをしたデ・ニーロは、何度もティクを重ねるなか、一滴の汗さえ流さなかった。汗だくの若い俳優たちは、そんなデ・ニーロを呆然と見つめていた。マイヤーズはそれを思い出しながらこう語る。「信じられないという面持ちの若者たちから、『あなたってすごい。どうして汗もかかずにいられるんです?』と訊かれると、ボブは、『何年もの鍛錬の成果だ。教えてあげるよ』と答えていたわ。あのシーケンスの撮影はとても楽しかった」

## ハイブランドからリアルクローズまで

ベン

「スーツのほうが楽なので」

ジュールズ

「そう。昔かたぎなのね」

ベン

「ええ、かえって目立つでしょ」

ジュールズ

## 「ただでも目立つと思うけど」

ファッション・サイトを運営しているのはジュールズかもしれないが、スタイリッシュなのは彼女だけではない。ベンの衣装を見れば、彼が頭のとっぺんからつま先まで身だしなみにこだわる男だということが分かる。Tシャツとジーンズで仕事をする若者たちは、つねに完璧な服装をしている彼から少しずつ影響され、身なりをもう少しきちんとするようになっていく。

ナンシー・マイヤーズはセットと同じように、衣装デザイナーと彼女のチームに Pinterest で写真を見せた。

衣装デザイナーのジャクリーン・デメテリオをマイヤーズに紹介したのは、シャネルで広報を担当しているマイヤーズの娘だった。「私はファッションに関することなら何でも喜んで参加したいし、ナンシーはファッションをよく知っている。ATFのオフィスには、若いヒップスター（流行に敏感で、インディ系のアートを好むタイプ）からシックなファッションまで、幅広い雰囲気があるわ」とデメテリオは語る。

デメテリオとマイヤーズはキャラクターたちについて話し合い、アイデアを比較した。「私は自分の参考写真を持っていき、ナンシーは Pinterest の画像を見せてくれたんだけど、ほとんど鏡のよう一致したの。そんなことはあまりないのよ。つまり、私たちの好みはとても似ているということで、それはとてもよかったわ。また、彼女がすばらしい審美眼の持ち主という点も、（組む相手として）有り難かった」

製作のスザンヌ・ファーウェルはこう付け加える。「ナンシー・マイヤーズ作品に際立つ要素のひとつが、衣装にも美術と同じレベルのこだわりで取り組むことと、最先端のファッションを登場させることなの」

ロバート・デ・ニーロについては、デメテリオは彼の専属衣装デザイナーであるオード・ブロンソン＝ハワードと協力した。「ボブにはいろいろなシャツやスーツを試着してもらい、最終的にブルックス ブラザーズとヒッキー・フリーマンを多く着ることになったわ。この映画の彼はブルー系とグレー系が多いわね」

マイヤーズは、ベンとほかのインターンを細かい部分でもはっきり区別したかった。「ベンは今編を通してボタンダウンのシャツを着ているので、ほかの人たちにはボタンダウンを着せないようにしたの」とデメテリオは言う。「若者たちの雰囲気としては、安めの古着と、（高級百貨店の）バーニーズやバーグドルフのやや高級品が混ざったブルックリンのヒップスター風ね。ベンは彼らに強い印象を与えるので、彼らも少しずつ外見を変え、ちゃんとしたシャツや、さらにはジャケットにネクタイまで身に着け始めるの」

アン・ハサウェイの衣装に関して、マイヤーズはこう語る。「ジュールズをどう見せるかについて、私にはいくつかアイデアがあったのよ。するとさすがジャクリーン、それを的確に実現してくれた」

マイヤーズたちは、ハサウェイの衣装を選ぶうえで、多くの要因を考慮に入れた。それについてハサウェイが詳しく話してくれる。「ジュールズはとてもシックだけど、母親でもある。だから彼女が着るものはすべて、子供と一緒にいても大丈夫なものか、少なくとも、この人は毎日5歳の子が待っている家に帰るんだと信じられるような服でなければならなかったの。私たちはシンプルさを軸に、上品でありながらも、クールなデザインを見つけたかった。そして、キャサリン・ヘプバーンについて話し始めたときに、ジュールズがもう少しはつきり見えてきたのよ。『じゃ、ジュールズ

はちょっとポストパンクのキャサリン・ヘプバーン風ね』と言ったとたん、私たちにはずっと明確なイメージがわいてきたの」

デメテリオは、ハサウェイの衣装がいちばんのお気に入りだと認める。「ジュールズの衣装を揃えていく作業はいちばん楽しかったわ。あるときの彼女は、ルーズな男物のズボンに古着のTシャツ、すごくカッコいいタキシード風ブレザー、粋なセリーヌのスニーカーにステキなシャネルのバッグ……という組み合わせだったの。私は、彼女には異なる要素をたくさん組み合わせて、ATFのみんなと通じるところがあるようにした。ひとりだけ完全に浮かないように。セリーヌ、サンローラン、ヴァレンティノ、エルメス、そしてパリのデザイナー、セドリック・シャルリエの作品をたくさん使ったわ」

中心のキャラクターたち以外にも、デメテリオはほぼ毎日、100人以上のエキストラに衣装を着せた。しかも彼らはふつうの通行人などのエキストラではなく、ファッション会社で働いているという設定なので、その活気を反映させなければならなかった。「ATFがどんな会社なのかという雰囲気をつかむことが大切だった」とデメテリオは語る。

その雰囲気をふくらませたのが、作曲家セオドア・シャピロによる本作のテーマ音楽だ。それに加えてマイヤーズは、全編を通してさまざまな楽曲を盛り込んで、演技をウィットで盛り上げた。使われた楽曲には、ベニー・グッドマンの「Ain't Misbehavin'」、KC&ザ・サンシャイン・バンドの「ブギー・シューズ」、メーガン・トレイナーの「オール・アバウト・ザット・ベース～わたしのぽちゃティブ宣言！」などが含まれ、あるシークエンスでは、それにふさわしく『オーシャンズ11』のスコアに敬意を払っている。

マイヤーズはこう締めくくる。「ベンはATFに応募するとき、ミュージシャンは自分の中に音楽がある限りは辞めないものだつつぶやく。私は、誰にでもその人なりの音楽があり、その音楽に対する情熱がある限り、続けられると思うの。この『マイ・インターン』を観て、声を出して笑ってほしいけれど、それと同時に、何か愛することがあるなら、それに対する情熱を失ってはいけないということを出すきっかけになってくれたらうれしい。それが何であれ、できる限り長く、できる限りうまく、続けることを願っているわ」

## キャスト

ロバート・デ・ニーロ(ベン)  
アン・ハサウェイ(ジュールズ)  
レネ・ルッソ(フィオナ)  
アダム・ディバイン(ジェイソン)  
アンダーズ・ホーム(マット)  
ジョジョ・クシュナー(ペイジ)  
リンダ・ラビン(パティ・ポメランツ)  
ジェイソン・オーリー(ルイス)  
ザック・パールマン(デイビス)  
アンドリュー・ラネルズ(キャメロン)  
クリスティーナ・シェラー(ベッキー)

## スタッフ

ナンシー・マイヤーズ(脚本／監督／製作)  
スザンヌ・ファーウェル(製作)  
セリア・コスタス(製作総指揮)  
スティーブン・ゴールドブラット(撮影)  
クリスティ・ズィー(美術)  
ロバート・レイトン(編集)  
ジャクリーン・デメテリオ(衣装)  
セオドア・シャピロ(音楽)

## CAST

ROBERT DE NIRO (Ben)  
ANNE HATHAWAY (Jules)  
RENE RUSSO (Fiona)  
ADAM DEVINE (Jason)  
ANDERS HOLM (Matt)  
JOJO KUSHNER (Paige)  
LINDA LAVIN (Patty Pomerantz)  
JASON ORLEY (Lewis)  
ZACK PEARLMAN (Davis)  
ANDREW RANNELLS (Cameron)  
CHRISTINA SCHERER (Becky)

## STAFF

NANCY MEYERS (Writer / Director / Producer)  
SUZANNE FARWELL (Producer)  
CELIA COSTAS (Executive Producer)  
STEPHEN GOLDBLATT (Director of Photography)  
KRISTI ZEA (Production Designer)  
ROBERT LEIGHTON (Editor)  
JACQUELINE DEMETERIO (Costume Designer)  
THEODORE SHAPIRO (Composer)

2015年 アメリカ映画／2015年 日本公開作品／原題: THE INTERN

上映時間 121分／ビスタサイズ／5.1ch リニア PCM+ドルビーサラウンド 7.1(一部劇場にて)

字幕: 岸田恵子／映倫区分: G／配給: ワーナー・ブラザーズ映画